



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

海老名弾正の朝鮮伝道と日本化問題について

著者	金 文吉
雑誌名	キリスト教社会問題研究
号	46
ページ	230-266
発行年	1998-01-20
権利	同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000008488

海老名弾正の朝鮮伝道と日本化問題について

金 文 吉

一 序 論

海老名弾正は、明治の日本プロテスタント教会の代表的指導者であり、その思想の独自性と影響力から考えて日本キリスト教史を理解する上で、内村鑑三、植村正久、小崎弘道らと共に不可欠の人物の一人である。しかし正統的信仰を一途に継承し、福音主義的教会の立場の代弁者であった植村、キリスト教諸教派のみならず、広く中央政界との交流を持ち、キリスト教会のまとめ役であった小崎、内に対しては聖書的信仰の純粹性を追求し、世に対しては非妥協的単独者として生きた内村、これらの人物に比較するとき、海老名弾正は一言では割り切れない問題的人物であったと言わざるを得ない。同時代のキリスト者の海老名評をいくつか引用してみよう。

内村鑑三は、海老名に対して、「植村は教会主義で、おまへ（海老名のこと：筆者）は国家主義、そしておれは精神主義だ」と評したと言われる。⁽¹⁾ また海老名とキリスト論をめぐって激しく論争した植村正久は、「海老名弾正氏は宗教的の人なり。廿有余年一日のごとくキリスト教の伝道に従事せらる。この靈的なるやいわゆる多くの正統的キリスト者の右に出ずべし。余輩は海老名氏の信仰その教理より善良ならんを望む。否然かく信するの理由なきにあらざるを感謝す」と述べている。⁽²⁾ 更に山路愛山は海老名について、「君の心は、流動せる蠟の如し、余りに強く一定の説に固執せず、故に君は今日に於ても君の最も善しと感じたる方向に向かって常に其説を変化す。……海老名君は、調子の善き人なり。誰にでも相手になりて、其人の氣に入りそうなる御世辭をいい得る人なり」と語っている。⁽³⁾

国家主義者、宗教的であるが正統的信仰者ではない——日本の人物、御都合主義的人物という様々なレッテルが海老名にはられていることからわかるように、海老名は同時代のキリスト者にとって良い意味でも悪い意味でも問題的人物と考えられていた。彼の多面性は彼の教えを受けた青年の中に、神道的キリスト教、国家主義の立場を取った渡瀬常吉から、吉野作造、小山東助、石川三四郎、大杉栄らにおよぶ人物が含まれていることにも表われている。

註

- (1) 佐波亘編『植村正久と其時代』、第一巻、一九三八年五四〇頁。
- (2) 『植村著作集』Ⅳ、三四六頁。
- (3) 山路愛山「我が見たる耶蘇教会の諸先生」(『太陽』一九一〇年十二月)

二 海老名弾正の朝鮮伝道論

海老名の朝鮮伝道論に入るに先立って、明治期の日本キリスト教会の植民地伝道(日清戦争で領有した台湾と、日露戦争で領有した樺太の南半分。また日露戦争の後に租借された関東州、巨大な権益を得るに至った満州、朝鮮、これらの地域での日本キリスト教会が行なった伝道)について簡単に見ておきたい。

日本におけるプロテスタント教会の伝道は、朝鮮、中国におけるのと同様に、アメリカを中心とした外国ミッションの援助、それらの派遣した宣教師の指導によって始められた。この点で、キリスト教会史の立場から日本、中国、朝鮮は明治期には大きく言って、一つの伝道圏を形成していたと考えられる。この間の教会の発展の中で顯著となった方向として、外国ミッションからの経済的、政治的、伝道の独立と、植民地への伝道の展開を挙げることができる。⁽¹⁾この二つの動きはともに、日清、日露戦争以降に顕わになったものであり、天皇制国家主義という社会的風潮を背景としたものであった。⁽²⁾各教派が行なった植民地伝道については大内三郎氏による総括などを参照いただくこととして、ここではいくつかの問題点だけを指摘するにとどめたい。⁽³⁾

まず第一点は、台湾、朝鮮、関東州伝道と言っても、中心は日本人キリスト教徒であって日本人伝道の外地への延長が主であること。

このことは本章のテーマである朝鮮においても同様である。⁽⁴⁾

第二に、日清、日露戦争後に現実的課題となった植民地伝道は、国家主義と日本の膨張政策と無関係ではない。しかし、全体としては、少なくとも日本キリスト教会の意識においては、植民地伝道はキリスト教の愛の立場に動機づけられたものであり、キリスト教自体の必然性に基づいていた。⁽⁵⁾

第三に、以上の第一、第二の植民地伝道の一般的傾向と比較して、日本組合教会の朝鮮伝道はきわめて特異であったと考えられる。まず、朝鮮伝道を行なった日本基督教会、日本メソヂスト教会において伝道対象が、朝鮮在住の日本人であったのに対し、組合教会は朝鮮人に対しても伝道を行なった。また、組合教会の朝鮮伝道は、政財界と朝鮮総督府からの直接援助を受けたものであり、天皇制国家の膨張政策と積極的に結びついたものであった。

このような日本組合教会の朝鮮伝道の有り方にとって、海老名の果たした役割は決定的なものであった。

以下の本章において、次の順序で考察を進めよう。

まず第一節「日本組合教会朝鮮伝道開始と海老名弾正」においては、前述のような特徴を持つ組合教会の朝鮮伝道その開始から三・一運動にいたるまで歴史経過に沿って具体的に分析し、この朝鮮伝道において、海老名と彼の弟子である渡瀬常吉の果たした役割を明らかにする。

次に、第二節「海老名の日韓併合観」、第三節「日本化政策」において、海老名の朝鮮伝道論とその背後にある彼の「日本的」キリスト教の立場を説明してみたい。

三 日本組合朝鮮伝道開始と海老名弾正

近代日本は欧米列強の植民地政策に対抗し、急速に近代化を進め、日清、日露の両戦争を契機にアジア侵略の方向へ向かっていった。朝鮮に対しては、日朝修好条規（一八七六年二月）で開国をうながし、日清、日露戦争によって中国、ロシアの支配から切り離し、イギリス、アメリカの了解の下で植民地化を進めた。⁽⁶⁾ 日本キリスト教会の朝鮮伝道もこのような時代を背景に日露戦争に前後して、急速

に現実化し始めた。日本メソジスト教会の機関誌『護教』においては、「韓国の日本人伝道は天主教を除いて新教中聖公会最初に着手し、最初は日本語に通ずる英国宣教師自ら仁川、京城を監したるが、其後日本伝道者、秋山氏出張せり、次に伝道を開したるは、メソヂスト・組合兩派」と述べられている。⁽⁷⁾メソヂスト教会においては、一九〇四年四月に木原外七が京城を中心としてメソヂスト京城教会を設立し伝道を開始し、⁽⁸⁾また日本基督教会は一九〇七年に石原保郎が日本基督教京城を設立した。⁽⁹⁾これに対して日本組合教会は、一九〇三年(〇月二日)に岡山基督教会堂で行なわれた「日本基督伝道会社二五年記念祝会」において、「海外伝道」着手を宣言し、続いて同年一月二四日に宮川経輝らが朝鮮伝道準備視察の為に渡韓した。同氏は入韓談において次のように述べている。

今回予が渡韓したる目的は言示迄も無く伝道の準備視察の爲であつた。尤も滞韓日数僅かに六日間とて、視察と言ふも到底完全なる能はず、寧ろ管見と言ふ可き程のものである。余が渡韓前兩三日に日本基督教会の貴山君が行かれたが、京城には予て京城学堂の渡瀬君第一銀行支店長の高木君両家族が、日曜の集会をして居られたので、同地へ着した翌々日即ち二十五日の夜、高木君方で懇親会が開かれ、席上余も一場の奨励演説を試みたが、集合者は二十六で、其過半は求道者であつた。同地にては伝道全一ヶ年参百円位は引受けるとの事故伝道師さえ送れば何時にても伝道の開始は出来るやうになつて居る。⁽¹⁰⁾

このように宮川経輝が朝鮮伝道準備視察に渡韓する以前に、既に京城には、渡瀬常吉、高木の二人を中心として集会が行なわれ、伝道の基盤が存在していた。組合教会は、後に剣持省吾を京城教会へ派遣し伝道を開始することになったが、これに入る前に、後に組合教会の朝鮮伝道の中心人物となる渡瀬が堂長をしていた京城学堂について若干述べておこう。

京城学堂は、日清戦争後の一八九六年に、横浜バンド出身の押川方義、⁽¹¹⁾本多庸一⁽¹²⁾を中心とした日本人キリスト教が、政治、経済界の有力者であつた伊藤博文、西園寺公望、近衛篤磨、大隈重信、渋沢栄一、および三井、岩崎両家等の後援を得て、「未ダ基督教ヲ信奉セザル東洋諸國ニ道ノ伝」え、「東洋善隣ヲ教化」し、具体的には「清韓諸國ニ文明的教育機関ヲ起サントスル」目的で結成したものである。そして朝鮮駐在の井上馨、加藤増雄、林権助ら歴代の日本公使の協力を得、日清戦争後に活発化したアメリカ宣教会を基盤とするキリスト教系の学校の設立、拡充と競合する仕方、平壤日語学校、東萊釜山学院、全州三南学院、大邱達成学校、等が設立された。京城学堂は日語学校の中で最も代表的なものであつた。その後京城学堂は、一九〇五年の朝鮮の實質的植民地化である「保護国化」とともに、その使命を終え朝鮮總督府に寄贈され、大倉喜八郎が校長となつてやがて京城善隣商業高等学校となつた。⁽¹³⁾京城学堂は、

教育という外見的形態によって朝鮮政府、欧米列強との対立と侵略的意図を巧みに隠したものであったが、それが日本政府の侵略政策の全体的構図の中で進められていたのは明らかである。このような京城学堂の学堂長を最初期の八年間勤め、京城の日本組合基督教会設立の基礎を作ったのが渡瀬常吉であった。¹⁴⁾

次に平壤教会に移ろう。一九〇八年、京城から北に、日本組合基督教会、平壤教会が設立され大津教会牧師であった山田兵助が派遣された。会員数一八名程度で、牧師宅で集会が行なわれた。その後、一九一〇年四月五日に捧堂式が行なわれ、海老名はこの捧堂式に、渡瀬—京城学堂を退き、神戸日本組合基督教会牧師であった—と共に参席した。海老名は一九一〇年四月四日に平壤に到着し、翌日の捧堂式で、次のように祝辞を述べている。すなわち、

欧米先進国が其植民地に移住するや何よりも先づ建築するものは会堂なり、渠等が荒涼たる新開地に於ても先づ神を礼拝し心靈上の慰安を得ん為め何物をも惜まずして会堂を建つるは実に感すべきなり、余此意味に於て此新築を祝す旨述べたり。¹⁵⁾

こうして日本組合教会の朝鮮伝道はその活動の拠点を獲得することができた。

しかし、一九一〇年の「日韓併合」は日本組合教会の朝鮮伝道を促進するものとなった。まずこの事情を朝鮮総督府の側から見てもよう。一九一〇年八月の「日韓併合」後まもなく、寺内総督はまさに朝鮮における〈天皇〉として絶大な権力を持ち、その下に憲兵警察制度という特殊な治安機構を—憲兵隊司令官を警務総長に憲兵隊長を各道警務部長に憲兵将校を警視に、憲兵下士を警部に任命する—、朝鮮全土に文字どおり網の目のように張りめぐらし、そして朝鮮人の生活の中に食い入り、言論、集会、結社の自由を完全に剝奪した。¹⁶⁾このような状況の中に朝鮮人を閉じ込め、国外との連絡を完全に遮断した上で、朝鮮人を日本化する、言わゆる「同化政策」が行なわれた。この「同化政策」のため、寺内総督はキリスト教を利用しようと考えた。まず、総督府の機密費から年額六千円を匿名寄附し、日本人の手で朝鮮伝道を行なわせるといふ案を、日本基督教会の植村正久に持ちかけたが、断られたため、次に海老名弾正に持ちかけた。海老名はこれを快諾し、年額六千円の寄附は一九二一年頃まで継続された。¹⁷⁾

寺内総督が「同化政策」のためにキリスト教を利用しようとした理由として、以下の三つが考えられる。

(一) 一九一〇年の韓国併合の時点において朝鮮キリスト教の信徒数は約二〇万人であり、一六〇〇を越える近代教育機関、一三万三千人の生徒、一二の病院等に及ぶ教勢の急速な拡大が行なわれていた(『基督教世界』一九一〇年九月二十九日における統計)。これは、

日露戦争後の信仰復興運動（一〇万求霊運動）が行なわれたことによる。

(二) キリスト教（カトリック）信者、安重根が一九〇九年一月ハルビンで伊藤博文総監を射殺した事件。

(三) 海西教育総会事件（安岳事件）。この事件の舞台である黄海道、安岳地方は、早い時期からキリスト教の影響を受け、近代教育が行なわれ、救国運動すなわち日本の朝鮮侵略に対する『義兵運動』の発生地である。海西教育総会というのは、一九〇八年に、金九、崔光玉、都寅權、李承吉、金鴻亮、安明根（安重根の従弟）など一六〇名の会員を擁する組織であるが、これが『義兵運動』の拠点である。と知った総督府は監視を強めていた。明治四三年一二月に安明根の独立運動が露頭し、金九などの指導者は一五年の求刑を受けた。以上の三つのことが示すように朝鮮においてはキリスト教会、あるいはキリスト教徒の影響力が強まり、特に反日運動との関係で無視できないものとなっていた。

従って、「同化政策」を推進するためには朝鮮キリスト教を同化することが不可欠の課題となり、そのために寺内総督は日本キリスト教会の朝鮮伝道を利用しようと考えたのであろう。

さて、初期の日本組合教会の朝鮮伝道は以上のような背景で開始されたが、本格化するのには「日韓併合」後であった。¹⁸⁾ 日本組合教会は日韓併合の二ヶ月後に神戸教会で総会を開き、全員一致で、朝鮮伝道を決定した。正式の派遣主任牧師には、八年間の京城学堂での経験のある渡瀬牧師が任命された。総会での朝鮮伝道のための募金一万二千余円を持って、渡瀬は一九一一年六月二日、朝鮮に渡った。これまで京城教会、平壤教会は朝鮮在任の日本人に対する伝道を行っていたが、渡瀬は、京城到着後に朝鮮人を対象として、伝道を進めた。同年七月一六日に京城のある朝鮮民間人宅を借りて、数十人の集会が行なわれた。七月二七日の『基督教世界』に寄せられた渡瀬の報告によると、

「殊に一六日の朝を以って新設の場所に於て小集会を催し、朝鮮伝道の第一歩を始むるを得たのは何よりの仕合で、何から何まで感謝の外はないのである。集合開始の準備として、金曜日之夜に二三の兄弟と協議し、一六日の十時に愈々集まりを開いた。僅かに五畳と二畳の鍵形の室に、日本人は淑明高等女学校の学淵澤能恵子、及同校関係の男子二人、朝鮮人では柳一宣（京城学堂卒業後に渡瀬常吉の高弟筆者）、金教明（官立法学校教官）、李丙植（農商工部土木課員）、瘦錫祐（学校教師）及小生と洪君にて、固より寥々たる光景であったが……今回開始した此の伝道が天父の祝の下に発展して一千五百万を救及の一助となり、余の不肖を憐

れみ給ふて此の大任を完了せしめ給はんことを祈り、希望と感激に由りて涙を催しつつ散会、柳一宣氏を執事、兼會計に選び次回より朝夕二回集會すべく講義所を仮りに漢陽教會と稱する」ことになった。¹⁹⁾

渡瀬は渡韓後まもなくして京城漢陽教會と同年平壤に箕城教會を設立した。渡瀬の師である海老名はこの時期に朝鮮で活発な活動を行なっている。すなわち渡瀬によれば、

之に就いても当局者の勇断と會員諸君の同情と、別けても神戸教會の兄弟が余をして後顧の微念だも懐かしめずして、快よく希望に鞭つて起たしめられたのは今更の様に感謝に堪へぬ所である。さても海老名、長田の両牧師が京城平壤両地の擴張伝道に赴かる其の一行に余も加はることとなり、一方には擴張伝道に参加し、他方には両氏に由りて朝鮮の同胞に紹介せらるることとなつたのである。²⁰⁾

先述したように、海老名は平壤教會捧堂式に出席以降、数度朝鮮に渡り、朝鮮民族に日本キリスト教の思想（『「日本的」キリスト教）を植えつけようと努力した。例えば、一九一〇年四月二日、京城キリスト教青年會主催の集會で「基督魂の發展」、皇城キリスト青年會（朝鮮キリスト教青年會）主催の集會で「神の國」という題目で講演を行なつたが、これらはいずれも後に見るように海老名の「日本的」キリスト教の立場を明確に示したものであり、これに参席した人は一千余名で、座席にすわれずに、ドアの外側、更には道路上にも人があふれたと言われる。²¹⁾

このような海老名、渡瀬らの朝鮮伝道開始期の布教活動にもかかわらず、日本人を対象とした京城教會、朝鮮人を対象とする漢陽教會、箕城教會を中心とした日本組合教會の布教は、必ずしも容易ではなかつた。渡瀬の『朝鮮教化成績報告』（一九一七年）によれば、

平壤は排日思想の根拠地と指目さるゝ程ありて日本人の宣伝する宗教たることを耳にするや反感と侮蔑を以て吾人を迎ふるの有様なりき、其の同宗教たる点より云へば欧米の宣教師も吾人の伝道を歓迎すべきが当然なりしも一二の外不幸にして吾人の眞精神を了解する者少なく吾人を以て単に彼等の繩張りを侵す者と為せしを以て一層吾人の事業は困難の度を加へたり、然れども京城に於ける漢陽教會と平壤に於ける箕城教會は鷄林の警鐘を以て任じ少しも他の圧迫排斥を意とせず敢然として信する処に向へり。²²⁾

このように日本組合教會の朝鮮布教は、朝鮮人の排日思想と欧米の宣教師との対立によって困難に直面した。朝鮮キリスト教受容史

を見ると、「甲申政変」を起点として各国宣教師が布教⁽²³⁾している。

こうした朝鮮に入国し布教する宣教師間の混乱と摩擦をさけるために、あるいは宣教事業を円満に行なうため、一八九三年（高宗三〇）、「分割的宣教」を組織し、地域別に宣教地を定めて布教することとし、また宣教協議会（Council of Mission）を組織し宣教規則を公布した。宣教規則一〇項を見ると⁽²⁴⁾

- ① まず労働者階級を対象として伝道し、後に上級階級を対象として伝道すること、
- ② 婦人を対象とする伝道と女子教育に特に力を尽す。これは家庭主婦が後孫たちの養育に重要な影響を及ぼすからである。
- ③ 基督教教育は、地方における小学校運営で大きな効果を得ることが出来る。だから教会、日曜学校、青年会を養成し教師を派遣すること。

④ 韓国人教育者養成に留意すること。

⑤ 聖書を韓国語で翻訳すること。

⑥ すべての宗教書を韓国語で出版すること。

⑦ 自給自足。独立心を持つこと。

⑧ 朝鮮人が朝鮮人を伝道すること、宣教師は朝鮮人教師養成だけに力を尽すこと。

⑨ 医療宣教師はキリスト教の愛を持って患者を治療すること。

⑩ 田舎に住む患者の治療は直接家庭訪問して行なうこと。患者は差別して治療しないこと。

初代の朝鮮宣教の苦勞は、例えば以上の一〇項目中の⑧にも表われている。朝鮮人を対象とした伝道は朝鮮人が担当し、宣教師は教師養成や特別集会などを分担することによって、各国の宣教師間の勢力争い、対立を避ける工夫がなされている。また宣教のために人脈の利用も行なわれた。すなわち渡瀬常吉が朝鮮に赴任し、京城南大門に到着すると「京城教会兄弟及旧京城学堂の同窓者が肩を摩して迎へて呉れたのである」と述べられるように、朝鮮伝道のために日本組合教会や京城学堂の人脈が大きな役割を果たした。

こうして朝鮮全土において布教が開始されることとなったが、日本組合基督教朝鮮全域伝道地の中で、北側の Canada Presbyterian の宣教地と南側釜山の Australian Presbyterian の宣教地に対応する地域には全く伝道されていない。特にこの両地域に組合教会の伝

道が行なわれていない理由としては、人脈に関わる問題がまず考えられるが、主要な理由はこれらの地域に組合教会以前に布教し、伝道を確立していたカナダとオーストラリアの宣教師団の神学と組合教会の神学的立場が対立したことによって、組合教会が活動することがきわめて困難であったことが挙げられる。アジアで宣教活動を行なった西欧キリスト教宣教師団の母体となった諸教会は福音主義運動の流れに立つ教会であって、一九世紀に朝鮮に布教した宣教師も、福音主義、正統主義信仰を持つ根本主義神学者であった。例えば、初期に活躍したカナダ宣教師 Herbert E. Blair は、平壤神学校の教育目標について次のように語っている。すなわち、

ウェストミンスター信仰標準、教会政治はカルヴィン主義精神を背景とし、すべての聖書解釈、信仰はパウロの超自然的解釈であり、韓国教会はこれらが無条件に受け入れなければならない⁽²⁾

という純福音的精神で教育が行なわれた。このように組合教会による朝鮮伝道以前は、在朝の宣教師の根本主義的福音主義的精神に基づいて宣教されてきたのであって、特に釜山地域のオーストラリア長老派の宣教政策は典型的な根本主義的でピューリタンの精神が強かった。このようなキリスト教がすでに定着していた地域では、自由主義的傾向の強い日本組合教会の宣教は困難であったのであろう。これに対して、日本組合教会の教勢が著しく伸長した京城、平壤地域は、メソヂスト教団の宣教地域であった。一九〇五年以来、メソヂスト宣教師と伊藤博文統監の間には親密な関係が結ばれていた。例えば一九〇七年五月二日にジョンズ (George HebenJohns) とスクレントン (W. B. Stanton) の二人の宣教師は伊藤の私邸を訪ねて、韓国の教会に関して討議した。この席で彼らが、「韓国人民をより有益なところへ引き上げようとする閣下の施政に対する真実なる同感と、あらゆる面での協力を惜しまないことを閣下において信じていたがきたら」(George T. Ladd, *In Korea with Marquis Ito*, pp. 63-64)と言ったのに対して、伊藤博文は「私は世間の噂を信じておらず、在韓宣教師たちを疑っていないばかりか、韓国人の道徳的および霊的な進歩のためのあなたの努力の価値を十分に認識しており、その成功を祈っています」(同上)と表明している。また、メソヂスト教団と日本総督府の密接な友好関係を示すものとして次のような例も指摘できる。すなわち、

明治三十九年の二月に故伊藤公爵が総監として赴任せられたが、総監は熱心に半島の教化に力を尽くし、当時の日本及朝鮮メソヂスト教会の監督であったエム・シー・ハリス氏とは特に親密の交際をなし、互いに襟懐を披瀝して意見を交換したのであったが、一夕、ハリス氏と会談中に公爵の言として『政治上一切の事件は不肖之れに任らんも、冀くは責下等其任に当られよ、斯くてこそ朝

鮮人民、誘導の事業は初めて完きを得べし』との一節は今も人々の伝へ知る所である。尚、伊藤統監は平壤にある日本メソヂスト教会の教会堂建築の際には金一万円を寄附して同事業を援助し、其他にも京城にある朝鮮人所屬の中央基督教青年会の事業を維持する為に毎年一万円を下附して奨励する所があった。⁽²⁷⁾

こうした伊藤博文総監時代からの密接な交流が日本組合教会の伝道の好条件となつたのである。

さて、次に渡瀬常吉を中心とした日本組合教会の朝鮮伝道の様子を概観しよう。渡瀬は京城漢陽教会を設立し、そして地方伝道師養成のために漢陽教会内に漢陽神学会を設立した。渡瀬の報告によると、『基督教世界』1・11・7) この神学会では「目下二〇名ばかりの学生が勉強して居る。教師は余と山本牧師と洪伝道師及柳一宣氏であつた。神学会の規模はこのように決して大きなものではなかつたが、渡瀬がこれにかける意気込みはかなりのものである。すなわち、

朝鮮に於ける精神的感卒の源泉が吾人の手中にあらねばならぬことは説明の必要がない。斯くなくして日鮮の同化は期せられない。朝鮮の同化は日本に取りて百年の大計で絶対の必要である。今や朝鮮は産業に教育に非常な変化を遂げつつある。此れと順応して我が伝道も大に其の歩を進めねばならぬ。吾人は大に我が國民に訴へて一日も早く此の問題を解決したいと思ふ……併しそれ迄に神学会を拡張して神学校に改め、適當なる教師を増聘し同時に伝道にも協力せしめ、且つ余の巡回区域を一層拡大し朝鮮教師の数を増加し、来年に於ては少なくとも本年度に倍加する結果を収めんことを期して居る。⁽²⁸⁾

このように渡瀬は組合教会の朝鮮伝道を朝鮮の日本への同化という近代日本の政治的課題、膨張政策との連関の中に位置づけている。彼は朝鮮伝道の拡大計画のために日本国内の組合教会に募金運動を行なうように請願し、同時に『朝鮮教化急務』(一九二三年一月)を刊行して朝鮮伝道の報告を行なつた。上の報告によつて朝鮮伝道に対する渡瀬の見解が明らかにされている。すなわち、

外国の宣教師に由りて伝道されつゝあるにも係はらず、吾人が日本人たる宗教家に、より多く囑望する所以の理由は……朝鮮人に對しては、二重の教化問題があると云ふ即ち人類としての教化問題と國民としての教化問題との二つである。……外国宣教師が其の責任を果し得るであろうか。吾人は外国の宣教師、其の第一の点に於ては、之を能くし得ることを信ずる。第二点の要点に於ても絶対にそを無能なりと。⁽²⁹⁾

ここで言う國民としての朝鮮人教化とは結論的に言えば朝鮮人を日本人と同化することである。つまり、「日韓併合」がすでに結ばれ

たからには、日本と朝鮮が一心同体となるのは当然であつて、「若しも、朝鮮の教化に日本国民の魂が入らないならば、併合に魂が入つて居ない証拠」⁽³⁰⁾であり、日本国民の魂を朝鮮国民に植えつけるという日本帝國植民地下の「同化政策」に対して積極的に協力するものとして朝鮮伝道は位置づけられた。後に論じるようにこの伝道論を根拠づけているのは、日本魂 \parallel キリスト魂という海老名の理論である。もちろん組合教会内部にも渡瀬の朝鮮伝道に反対する者があつた。柏木義円は『上毛教会月報』（14・4・15）で次のように述べてゐる。

福音宣伝は福音宣伝である。基督の福音は二つある可らず。保羅は基督と其の十字架の他に汝等の中に在て何をも知るまじと心を決たと曰つて居る。基督教の伝道の目的は、単に基督の福音を宣伝して人をして悔改めて神の子とならしむるの一事の外はない。……如何なる人種をも敵視す可らず、嫉視す可らず、これ基督の心である。斯くして内鮮人自ら相融和すべし、基督の御名を以て相融和せしむるは第一の目的のみで十分である。内鮮人均しく共に日本国民であるとの自覚を与へ、而して後ち、之に由て相融和せしむるが如き、他に自ら之を為す者があるであらふ。我福音の関する所ではない。……敢て其の日本国民化を標榜して彼等と相対するが如き、これ伝道の本旨なる可きか如何……⁽³¹⁾

このような激しい反対にもかかわらず、一九一三年一〇月に日本組合基督教会神戸教会で開かれた第三〇回總會において日本組合教会朝鮮教化資金募集委員会が設立された。この委員会の委員長となつたのが、海老名弾正である。海老名は『朝鮮教化に就いて天下の有志に訴ふ』というパンフレットの内で次のように語っている。すなわち、

皇天の聖命を遵奉して人類救済の爲めに献身するは宗教家の本命なり。……明治四三年日韓併合の幸あるや吾人は之を以て平生の祈願を実現する最良の機会なり。……朝鮮に於ては宗教家として吾人は二重の責任を感ず。一は彼等をして神の國の民たらしめんと期する所謂純宗教的の立場に属するもの、他は彼等を同化して我が忠良なる臣民たらしめんとす。⁽³²⁾

このようにキリスト教化 \parallel 日本への同化という思想に関して、海老名と渡瀬は全く一致しており、こうしたキリスト教理解は「神道的」キリスト教の立場からすれば当然の帰結と思われる。募金は三年計画で進められ、約三二、九二二円集まつた。海老名は『基督教世界』一九一四年一〇月八日、で次のように報告している。

此募金に付き有力なる声援を与へたるは、寺内伯、大隈伯及び渋沢男なりき。寺内伯は在京の石切にて東京有数の事業家招待会

に於て我々組合教会の朝鮮人伝道に多大の賛成を表し、有力家の援助すべきことを陳べられたるものにて、確に大なる声援なりしと認む。又洪沢男は此招待会に於て寺内伯の演説に賛同したるのみならず、多くの紹介状を認め、又は自ら書面を以て他人を誘導して此募金の為め尽力せられたるは、有力なる声援を与へたるものにて、岩崎、三井、古川諸氏等の義挙に關係あり。

こうした募金運動の結果、九一名の寄付申込者があった。

以上のような募金に支えられて、朝鮮伝道は進められたが、その開始わずか七年で日本全土とさして差のない数の信徒を獲得するという異常な教勢の発展は如何にして可能であったのだろうか。海老名らが募金運動を開始以後、一九一四年までは四七〇〇〇人程度であった信徒数は一年後の一九一五年には九〇〇〇人を越え、一九一七年には一一〇〇〇人まで増加している。また教会経費においても、募金以前は一年間に一四五〇〇円程度であったものが一九一七年には約三〇〇〇〇円となっている。更に教会数も、一九一四年に五五教会であったものが、一九一七年には一四三教会に、すなわち三年間で三倍となっている。但し注意すべき点は、一九一七年の『日本組合基督教會便覧』の「朝鮮人教会」表の示すように、約一四三箇所の教会の内、その三分の一である約五〇余教会が「加入」教会であることである。また日本組合基督教會に所属する教会はほとんどが自立経済ではなく、日本組合教会の経済的援助を受けている。これらのことから明らかになるのは、日本政府、特に朝鮮総督府及び財閥の援助によって行なわれた伝道において採用された伝道方法が、当時経済的に自立できないでいた教会に日本組合教会の援助を与えて、日本組合教会に「加入」させるという方法であったことである。例えば平安北道の江界教会、全南長城教会の場合、元々長老派米国宣教師所属教会であったものが、借金を多く抱えていたために、現地の車学淵（京城学堂出身、日本組合教会会員）を通して組合教会に加入した。³³ 西欧宣教師の宣教政策として「自立自足」のローガンが掲げられたことから、朝鮮の諸教会が西欧宣教師から十分な援助を受けられず、経済的に困難な状況に陥ったと考えられる。また「憲兵や巡査は基督教を信するなら組合教会へ往けと鮮人を奨めて居る」との報告からも分かるように、組合教会の朝鮮伝道は朝鮮人の生活の中に食い込んでいった朝鮮総督府の治安機構の後押しを受けて進められた。以上のような伝道方法によって、大正六・七年に教勢は急速に拡大し、海老名と日本組合教会が目指した目的はある程度達成されたと言えよう。渡瀬の『朝鮮教化成績報告』によると、

以上吾人は各種集合の朝鮮人の精神生活に及ぼせる一斑を述べたるが、茲に更に重大なる精神的感化を及ぼせる方面あるを一言す

るの已むを得ざるものあり。そは礼拝並に特別なる儀例が彼等に及ぼせる感化影響なりとす。毎日曜の朝夕に一定の集合を為すとが来会者に敬愛人の大義寛らしむるは勿論、柔和、忠愛、正義、忍耐、貞節、慈孝の心を培養すると共に、端正にして優雅なる態度、真摯にして質実なる品性を養成せしむるものありて、年一年会員の向上の目覚ましきものあるは吾人が喜び禁ずる能はざる所なるが、国家的儀例を我が宗教的様式に由りて舉行する場合、例へば先帝崩御の際には敬帝式、今上陛下御大札の際には奉賀式等を舉行する場合ある毎に、何処となく国民的自覚を生じ礼容を保ち、敬虔の念に充つる様やかて内地の心ある人々と並び立つも遜色なきを得べしと思はしむるものあり。且下国家的儀例に関する唱歌を我が宗教的風尚に由りて編纂しつゝあり。此れが成就の日には一層の効果を現はすを疑はず。斯くて我が教化の結果は自然に彼等をして忠良の臣民たるの自覚に到達せしめ、それに相応はしき品格精神の生じつゝあるは吾人が喜んで諸君に証言し得る処なりとす。

このように、キリスト教化に日本人への同化（日本人精神の植えつけ）という二重にして一体の目的を持って始められた日本組合教会の朝鮮伝道においては、キリスト教儀式の様式で日本的国家的儀式を行なうという仕方での目的達成が計られた。こうした朝鮮伝道論を基礎づけたのが、第三章で論じられた海老名の「神道的」キリスト教であった。その点については、以下の第二、第三節で論じられねばならない。最後に日本組合教会の朝鮮伝道の結末について一言しておきたい。組合教会の朝鮮伝道は大きな成果をあげたにもかかわらず、一九一九年三月一日の三一運動以降になると、信徒数を急速に減じることとなった。そして、一九二一年の日本組合教会第三七会総会で、朝鮮伝道部廃止が決議され、朝鮮組合教会は朝鮮会衆教会（柳一宣が会長）に改称し、渡瀬は一九二二年に日本に帰国した。海老名はその後も続いて朝鮮を訪れては会衆教会の活動と朝鮮人伝道に従事するが、日本組合教会の朝鮮伝道はここに終結されることになった。

四 海老名の日韓併合観

前節においては海老名、渡瀬らを中心とした日本組合教会の朝鮮伝道を歴史的事実関係の方から概観してきたが、本節と次節では、そのような具体的活動を動かしていた海老名の思想が分析されねばならない。この思想とは、これまで繰り返し述べてきたように「日

本的「キリスト教という海老名の立場と密接に結びついたものであって、「日本的」キリスト教の具体的問題における展開と考へうるものである。本節では、植村、内村との対比を通して、海老名の日韓併合観を明らかにしたい。

海老名は日清戦争以降、朝鮮合併論を唱えてきていたが、一九〇四年七月一日付、すなわち日露戦争中に、『新人』において次のような論説を発表した。

韓国の如きは実に同一の憂患を繰返すものにあらずや。曩に親清派と親日派と相闘ぎ、今は親露派と親日派と相争ふ。此の如き内憂は外患よりも恐るべきものなり。韓国の如きは事大主義を以て国是とするの外妙策なかりしならん。然かも事大主義は外に二大帝国を有するときは、勢ひ國家を二分せざるを得ざるなり。基督曰く人は二主に事ふべからずと、國家も亦二主に事ふべからず。韓国の如き、尚事大主義を維持せんとして分争せば、其自滅せんこと鏡に懸けて見るが如し。因て今や世界の大勢に鑑み、隣邦の盛衰を思ひ、民族本来の特質を考へ、断々乎として進退去就を決せずんば、誰れか韓民族の衰亡を予言せざらんや。進退去就とは何ぞや、他にあらず、露に合同するか、日に合同するか、其一を選ぶにあり。此際韓国の志士は其生命を賭して大英断を行はざるべからず、若し夫れ今日の如く喧々囂々として政權争奪に汲々たらば、韓国の滅亡は誰れか之を疑はんや、韓人は子の合同論を以て売国奴の言分となすならんか、こは不見識の最も甚しきものなり。誠に見よ、日耳曼帝国の今日あるはプロシヤの主權を是認して、幾多の聯邦が之に合同したるが為なり。更に三世紀前に遡れば、スコットランドの如き、アイルランドの如き、幸に英國と合同し、今日の大英國を形成するに至れり。……韓人の合同すべき民族が日本たることは火を見るよりも明なり。左に其理由を陳べし。日韓民族は同一種の民族なり、同一種族の民族が合同するは世界の常例なり、……⁽³⁶⁾

このように海老名は日韓併合を積極的に肯定し、その根拠として、世界史における様々な実例を挙げ、また日本と朝鮮の民族的な同一性を指摘する。海老名にとって「日韓併合」は歴史の必然性であり、特に日本人にとっては歓迎すべきことと考えられた。すなわち吾人が日人の為に日韓併合を謳歌する所以は他にあらず。是れ日本国民が偉大なる國民となる機会たるべければなり。人は子女を設けざればその母たり父たりの資格を養成し得ざるなり。一國民も他國民を合併することなくんば、その偉大なる靈能を發揮し、長者の資格を養成することを得ざるなり。日韓の合併は千古未聞の偉業なり、建国以来國民の実験せざりし所なり。しからば帝國民は此合併の偉業に於てその本来の靈能を發揮せずんばあらず。日本は従來の島國根性に死して新國興民の氣象の復活すべきなり。

……大日本帝国の将来は旭日の東天に昇るが如くなるべし。しかして韓人はこの大光榮に参与するを得ん。吾人人道の名を以て、神國の名を以て日韓の合併を謳歌せざらんと欲するも得んや。³⁷⁾

こうして、海老名にとって日韓併合は同一種民族の必然であり、日本、そして朝鮮にとつても画期的で偉大な出来事と捉えられたが、それは更にキリスト教の福音に根拠づけられた。ここに、海老名の「日本的」キリスト教との結び付きが明らかになる。すなわち、

基督の福音は博愛のそれにあらずや。……吾人は励んで基督の福音を宣伝すべきである。吾人は熱禱を捧げて伝道し敵愾心を靈化して博愛心となし、政治的野心を去つて、公明正大なる基督魂を受くべきである。是れ朝鮮をして精神的に偉大ならしむ所以ではなからうか。此の精神的偉大を發揮し来るときは、日韓の基督教徒が大日本帝国に於て優勝旗を得んことは、吾人の信じて疑はざる所である。日韓の基督教徒は帝国中に帝國を發揮するものである。³⁸⁾

ここに海老名の日韓併合観の核心が明らかになる。彼にとつて日韓併合は、キリスト教の福音宣教に結びついた宗教的意義を持つものであり、魂の問題であつた。しかし注意すべきことは、海老名にとつて宗教と政治は別問題ではなく、むしろ一つのものと考えられていたことである。すなわち、日韓併合という政治的事柄は、基督魂の受容においてはじめて完全なものとなることができるといふのが海老名の立場である。従つて、日韓のキリスト教は、日韓併合という政治レベルの問題と、日韓の政治的民族的对立を、魂の、つまり宗教的レベルで解決し、敵対する二つのものを一つのものに靈化する任務を持つことになるのである。こうして日韓併合はキリスト教信仰の立場、(つまり「日本的」キリスト教)から意義づけられ、積極的に肯定される。これが組合教会の朝鮮伝道の論理に他ならない。

さて、海老名の日韓併合観をより詳細に分析する前に、海老名と対照的立場を取る植村正久と内村鑑三の日韓併合を見ておこう。³⁹⁾

植村の日韓併合についての見解は海老名ほど積極的、肯定的ではなく、微妙である。彼は、日本の安全と、東洋の平和のために、日本が先進国として朝鮮を合併する権利を持ち、「日韓併合」が神からの天職であるとする点で海老名と一致する。しかし、海老名において、日本と朝鮮が親と子という従属的關係で捉えられているのに対して、植村は朝鮮キリスト者の独立心、愛国心を承認し、賞賛している。すなわち、

朝鮮のキリスト者が國を憂え、獨立を重んじ、他の威力に對して反抗するの氣勢を保つということが事實ならば、……高尚な精神

的方向から人道の側に立ち、これを批評するならば、かえって末頼母しく、後世恐るべしとでも言うが適當ではあるまいか。敵の健気な振舞にも感服する日本の武士道から言っても、そうであらう。……朝鮮八道せめては少数でもこういう程の者無くしてどうなるものか。⁽⁴⁰⁾

植村は朝鮮人の独立の志を理解し、その点で日本の朝鮮併合や統括を無批判に肯定したのではなく、むしろ批判的に事態を見ているところに海老名のように宗教と政治を一つに見て、政治事柄を無批判に、宗教的に承認するのは異なった姿勢が見られる。しかし、植村においても、日清、日露戦争と「日韓併合」が神の摂理の下にあって人類の進歩開発と平和をうながす契機と捉えられる限りは、植村の批判も明治の天皇制国家と帝国主義自体の発展を肯定するという論理の枠内にとどまるものであった。

海老名、植村と違って、日韓併合に疑問を発したのは、非戦論を唱えた内村鑑三であった。彼は「日韓併合」の際に、
 国を獲たりとて喜ぶ民あり、国を失ひたりとて悲む民あり、然れども喜ぶ者は一時にして悲む者も亦一時なり、久しからずして。

二者、同じく主の台前に立たん、而して其身に在りて為せし所に循りて鞠かれん、人、若し全世界を護るとも、其靈魂を喪はゞ何の益あらんや、若し我領土膨張して全世界を含有するに至るも我が靈魂を失はゞ我は奈何にせん嗚呼我は奈何にせん」と述べている。⁽⁴¹⁾ また、ある宣教師が朝鮮キリスト教の状況について、書簡で、「我等当国在留外国宣教師全体の与論に従へば、朝鮮国は多分日本国に先きだちて基督教国たるべしとのことである」という言葉に対して、⁽⁴²⁾ 内村は次のように答えている。

余輩は朝鮮国のために此事あるを喜んだ。彼国は今や實際的に国土を失ひ、政府を失ひ、独立を失ひ、最も憐むべき状態に於てある。而して恩恵ある神が地上における彼等朝鮮人の此損失に対し靈の財を以て彼等に報い給ふとは然もあるべきことである。……神は必ず何物かを以て朝鮮人の地上の損失を償ひ給ふに相違ない。⁽⁴³⁾

以上、海老名の日韓併合観の中心点の指摘と、植村、内村との比較が行なわれたが、次に海老名の見解を「神の国」運動を手掛りにして詳細に分析してみよう。先に見たように海老名の日韓併合観は同時代の植村、内村と比較して、日韓併合を積極的に肯定し、キリスト教の立場からその意義を承認するものであった。彼の見解の特徴は、日露戦争勝利、日韓併合という「国の膨張」を「神の国」の運動と同一視するところにある。例えば、一九一〇年一〇月、すなわち「日韓併合」二ヶ月後の『新人』には次のような論説がよせられている。

日韓民族は既に同一国民族となりたり、既に同一国民となりたる民族の宣教師は宜しく速に合同して一団となるべし、従前の如く相互に日韓の区別を立て、論争するの要なきなり、吾人は日本伝道の名の下に協心協力し布教の政策を一途にせんことを望まずんばあらず。外国宣教師が基督の福音を宣伝して日韓人同化の媒介者たらんは、そが神の国を地上に建設する一大使命にあらずとせんや。

このようにキリスト教的な「神の国」建設の思想を海老名は「日韓併合」という政治レベルの事柄と一つに考え、日韓の同一民族化と連続的に考えている。これは神と世界の連続的理解、総合連続的思考方法、そしてそれらに基づく「日本的」キリスト教に根拠づけられるものであるが、海老名の「神の国」運動は、内村のそれと比較するとき、両者の相違は明らかになる。内村は明治四四年九月一〇日付の『聖書之研究』一三四号において「神の国と其義」という論文を載せ、次のように述べている。

神の国とは信者が神の名を以て自己の努力に由て地上に建設せんとする理想の社会を云ふのではない、神の国とはキリストの再臨に由て彼が万物を己れに服はせ得る能力を以て実現し給ふ未来の聖国である。⁽⁴⁴⁾

内村にとって「神の国」とは人間の努力によって地上に建設され得るものではない。それは国家の膨張という政治レベルの事柄と断絶した、終末論的なキリスト再臨によって実現する聖国と考えられる。これは、「神の国は現世に実現すべきものにして、神は種々の方法を以て神の国を此世に建設しつつあり」という海老名とは、鮮やかな対照を成す。その点で、海老名と内村は、キリスト教思想における、「神の国」論、終末論の二つの対立的類型を代表していると言えるであろう。⁽⁴⁵⁾ こうして海老名は「神の国」を地上における国家建設、国家膨張によって実現することを意図し、明治三四年五月の『新人』に「満州問題と朝鮮経営」という論文を発表した。彼は次のように述べる。

日韓問題の解釈は益緊急なる覚ゆ、如何となれば朝鮮問題の一決は我帝国立脚の地点をして確立せしむるが為に、支那満州問題の解釈に大なる便宜を与ふるものあればなり、吾人は今茲に朝鮮経営を詳論する違あらず、故に唯其大綱を掲載するに止めん。

一、朝鮮に対する従来の露骨外交を一変して巧妙なる懐柔手段に出づる事。

二、京釜鐵道を速成する事。

三、京義鐵道を買収して速に之を竣工し滿州一貫鐵道に連結する事。

四、日韓銀行を設立する事。

五、保護金を与へて、朝鮮移民を奨励する事。

また、日露開戦に先立つ一九〇四年二月の『新人』に掲載された「日本民族の膨張と教化力」においては、

露国は軍港の経営を遂行し、港灣の改造を成功し、着々東清鐵道を敷設して、宛然露領の靚あらしむるに至りたるは、流石に彼れが膨張力の偉大なるを証するものなり。之に反して日本は何をなしつゝありしか。支那保全とか、韓国独立とか、徒に大言壮語し、空名虚栄を貪りて、京釜鐵道をすら布設すること能はざりしなり。……農夫も多く行くべし、商人も多く行くべし、政府は之を奨励して、益其委任の便を速ならしめよ。

と述べられている。このように海老名は日露戦争に前後して「膨張論」を唱え、滿韓の文明化＝日本化を神よりの使命と考えている。この点は次の引用によって明らかである。一九〇四年八月の『新人』における「戦後最善経営」によれば、

日本民族に滿韓を文明化し日本化するの能力あることは、誰れも疑を入れざるべし。しかも滿韓を文明化するとは何の事なるか、吾人の聞かんと欲する所なり、滿韓の沿海を文明化し、滿韓の山林を文明化し、滿韓の田圃を文明化し、滿韓の市街を文明化し、滿韓の道路を文明化し、滿韓の交通を文明化することは、我れ之を聞くしかも未だ滿韓人を文明化し日本化することは我れ之を聞くを得ざるなり。何ぞ前者を喋々する者の此の如く多くして後者を唱道する者の此の如く少なきや。吾人の根底に映するもの多く貴重すべきありと雖も、未だ嘗て人間ほど貴重なるはあらざるなり。朝鮮の水田滿州の麦圃誰れか之を欲せざらん、其金銀銅山の如き、其鬱蒼たる森林の如き、誰れか之を欲せざらん、其吾人を利益するの多きは挙げて数ふべからざるなり。

このように、「神の國」の建設というは具体的には、日本の領土を拡大し、その國の文化を發展させ、産業經濟を伸張させるといふことである。しかし、これらはすべて日本の利益という観点から考えられている。さらに、海老名の言う「同化」は「彼等の利福」よりはむしろ「日本魂」を植えつけ、日本民族に同化させることに他ならない。すなわち、

他民族を同化して自己民族と平等一致ならしむることは、其能く為し得べき所にあらず。民族を同化せんとするには彼れのものを奪ふべからず、寧ろ我れの最も貴重なるものを彼れに与ふべきなり、即ち我れの最も貴重する日本魂を彼れに与へずんばあらず。既に此魂を彼れに与ふるを肯てせんか、我財産の如き、何ぞ之を彼の為に惜むことあらんや。我れの日本魂を彼れに伝道するものは、此魂

の有する凡ての福利を彼に分与するものなり。之を日本魂の伝道者といふ。此の如き伝道は無窮なる愛の源泉に其博愛の力を見出すものにあらざれば、成功すべきにあらず。

このように「神の国」の建設は、日本の領土の膨張という政治レベルの事柄にとどまらず、日本魂の分与という精神的宗教的レベルに及ぶ。また「神の国」建設は個人↓国家↓人類へと展開し、個人の自覚、国家の発展、人類の進歩は「神の国」の運動の中に統合される。

我国には未だ真正の意味に於ける個人主義の樹立せられ居らざるは慨すべき也。個人主義と云へば直ちに我儘勝手の振舞を為すものと心得る者多し、是より大いなる間違はなし。真正の個人主義は國家社会天地宇宙との關係を離れて決して成立するものにあらず。此理極めて見易くして人の之を悟らざるや久し。例へば爰に一個の海老名弾正あり、余は一個の弾正としては何程の価値あるやを知らず、海老名家と云ふ由緒ある一家の一員として而かも今や其家の家長として存するが故に価値あるなり。而して此海老名家は封建時代に遡れば彼の英雄立花宗重の柳川藩の家臣なるが故に茲に一層の価値が加はり来るなり。而かも更に一步を進めて余は大日本帝国の臣民なるが故に無限の価値を自覚せざるを得ざる也。而して日本は東洋の一國にして東洋は地球の一部、地球は太陽系の一部にして太陽系は宇宙の一部にあらずや、故に一個の海老名弾正は決して単なる一個人にあらず……基督教の日本教化に於ける大使命は即ち國民各自をして個人の価値を自覚せしむるに在り。

個人、家、國家、人類を統合する「神の国」の運動の一環として「日韓併合」、すなわち日本民族による朝鮮民族の統治も考えられる。その際にキリスト教は重要な役割を果すものとされる。

日本人は韓国人の個人々々のために果して何事を尽しつゝありや。政治的にあらず殖産的にあらず、眞の韓人の靈魂を受けて其幸福を企図するの努力は日本人の未だ着手せざる所なり。……。神の国の理想を世界人類の間に実現するは基督教の最大使命なり。

……基督教によれる日本の教化は、敬神思想の發揮、個人の価値の高調、一夫一婦主義の確立、及び博愛心の鼓吹の四方面に向つて、飽まで其使命を尽すに在り。

以上のように個人↓家↓國家↓人類という過程で実現する神の國建設こそがキリスト教の使命とされるが、この神の國の形態として、具体的には「列國の大家族」というものが考えられる。海老名によれば、

世界列国の大家族は必ず大宗教を有する、即ち基督教である。(中略) 所以は民族的と世界的との二大要素を有するからである。……日本国民の宗教も宜しく此二大要素を有せねばならぬ。……吾人は基督教の伝播を主張すると同時に、在来の神道に顕はれたる民族的精神を保有せねばならぬ。我国民がその独特の宗教と道徳を有すると同時に、更に世界的大宗教の真理を信奉し、以て列国の大家族に加入するを要する。⁵⁹⁾

このように列国の大家族は、世界的普遍的要素(キリスト教)と民族的特殊的要素(日本精神)との統一(「日本的」キリスト教)*を成立条件とする。この条件をより具体的に述べるならば、

- ① 列国の思想を発表し得る共通の言語の普及
- ② 外国語の研究を盛んにすること
- ③ 翻訳書を増すこと
- ④ 列国経済に於ける利益の分配
- ⑤ 国際結婚の拡大
- ⑥ 普通教育の普及
- ⑦ 宗教道徳の普及⁵⁹⁾

これらの条件を満たすことによつて、先に述べた普遍的要素と特殊要素を統一し、個人から家族、国家、人類へと進展するプロセスの中で「神の国」を列国の大家族として建設してゆくこと、そして、このことが日韓併合の意義であり、この中で日本魂を朝鮮民族に、植えつけ(この点で、基督魂と日本魂は同一視されている)、朝鮮人の敵対心を融和することが日韓キリスト教の使命であるということが、海老名の確信であった。彼は「仮令激烈なる衝突を肯てする事あらんも、吾人は断じて悲観しないのである。蓋し神の国の發展はこの衝突の間にその歩武を進むるも知れぬ」と断言している。⁶⁰⁾海老名にとって近代ブルジョワ社会の成立(明治維新)は「神の国」の実現であり、世界史の進歩の中に神の計画は成就すると考えられている。このような海老名の思想は、しばしば自由主義、歴史主義あるいはヘーゲルのと言われる。⁶¹⁾

以上のように海老名においては「神の国」の運動と国家の拡大とが同一視されたわけであるが、以下、このような前提のうえで海老

名の「日韓併合」観をより詳細に見てゆこう。海老名の「神の国」の思想は日本組合教会の明治二八（一八九五）年の奈良大会宣言にすでに表われているが、日露戦争になると國家の拡大と「神の国」の実現の同一性が断言されるようになる。彼は明治四〇年九月の「帝国の使命と韓国の復活」という論文において次のように述べている。

吾人が日韓の合併を主張するは、帝国の為のみにあらず、又韓国の為なるを以てなり。故に新協約を歓迎するも、伊藤総監の健康を折るも、独り帝国の為のみにあらず、韓国の為ならずばあらず……、然れども過去十年に二大戦争を肯じたるは何の意義なりしか、日本国民は之を想はずんばあるべからず。韓国経営の費用は二大戦争費の継続費と覚悟せざるべからず。而して此経費は久からずして賠償するを得るのみならず、又大に帝国の利得とならんは吾人経済家にあらずと雖も疑はざるなり。日本帝国にして此目的を達することを得んか、韓国は滅亡するにあらずして、実に復活するを得るなり。吾人は韓国の復活を賀せざらんとするも得んや。韓人にして幸に此大義を了得することを得んか、……基督曰く其生命を得る者は之を失ひ、その生命を失ふものは之を得べしと……。韓国民は滅亡するにあらずして復活するなり、日本の勃興は韓国の幸福となり、天長く地久しく、韓国民族をして日本民族と同じく天津日繼の天皇を謳歌せしむるに至らん、是れ日本の使命にあらずとせんや。⁵⁴

彼の主張によれば、日清、日露の二回の戦争など、朝鮮を開発し文明化するために巨額な国費が使われているがそのことによつて「韓国は滅亡するにあらずして、実に復活するを得るなり」と言える。朝鮮は長い間、清国と事大主義政治の下にあり、「朝鮮の文明は滅茶々に打ちこはしてある、よくも根から葉まで打ちこはしたものである。外国は韓国政府を虐待し、政府は人民を虐待し、人民は自然を虐待した為に、朝鮮の文明は跡を絶つまでに至つた」⁵⁵が、日本は隣邦国として朝鮮を独立させ、文明化する義務がある、と海老名は考える。日韓併合は日本の侵略というよりも、朝鮮を文明化し独立させるものであり、「神の国」の発展として位置づけられる。このように海老名においては日韓併合も宗教的視点から、日本魂の受容による日本化の問題とされており、ここに彼の見解の特徴がある。

では日韓併合にとつて、海老名の言う日本化はどのような意味を持っているのであろうか。一九一一年六月一日付の『基督教世界』の「朝鮮伝道の宣言書」においては、「日露戦争後の最後の勝利は朝鮮民族の精神的征服である。而して此事たる明かに吾人基督者の責任である。此大責任を全うする為には如何なる犠牲も決して高しとしない」と言われている。日韓併合は政治的併合において完了す

るのではなく、精神的征服に至らねばならず、この意味での日本化にキリスト教の使命がある。日本化、すなわち日本民族と同じ日本魂を受けることによって「日韓併合」に対する不満あるいは恨みが一掃されねばならない。もちろん彼も朝鮮民族が日本に反感を持つのは一面、当然と考えている。つまり、

恐らく彼等の中には、我大日本帝国に対して一種の怨念を持って居るものもあるであらう、予はそれを疑はない、尤もであると思ふ。わが日本人でも、どうであつたらうか。王政維新から明治十年迄と云ふものは、一種の怨恨を抱いて明治政府に向つて、否、明治十七八年頃に至つても、田舎の百姓共は、一種の恨みを抱いて、明治政府の悪口を云つて居つたのである、今でも恨みを懐いて居るものがあるかも知れないである。薩長に対して常に反感を持つて居るものは少くない、朝鮮人が日本人に対して、一種の反感を持つて居ると言ふことは、我々は容赦してやらなければならぬ。⁽⁸⁷⁾

このように、朝鮮民族の恨みを解決するのに最もふさわしいのはキリスト教の伝道であり、ここに朝鮮伝道の使命がある。すなわち然ながら幸にして彼等は進取たり得ることが出来る。文明の空気を吸収することが出来る。非常に世界的の精神になることが出来る。神の國に這入つて行くことが出来るのである。彼等が政治上の場合から見ると、日本人に対して不快の念もあらう。色々の念に於て不快の感に衝たれるかも知れない。然ながら神の世界に入るに於て、彼等は、日本人の爲めにも其幸福を折ると云ふ精神が必や起るに相違ない。日本人も超越的的世界の大精神を以て、之に接しなければならぬ、此意味に於て、朝鮮人と日本人とは、貴い基督教に於て、学ぶことが出来る。⁽⁸⁸⁾

朝鮮併合は朝鮮の政治的併合にとどまらず、朝鮮人の精神を日本化し、朝鮮人に日本魂^{キリスト教魂}を植を付るという問題であるが、キリスト教魂を受けて日本化し、世界的大精神の進化に参与するという点で、朝鮮民族は良い条件を持っている。

此世界的大精神は、精神界に於て、日本人が先へ捉へるか、朝鮮人が先きに捉へるか、どちらが先きであるか。日本人にはナカムむづかしい、非常にむづかしい。何故なれば、色々の物が邪魔をする。国家的思想が之を邪魔する。狭い意味に於ける忠君愛國主義が之を邪魔する、……ところが朝鮮人はさうでない、彼等は祖先に於て誇る所は一つもない、國家に於ても誇る所はない、所謂忠君愛國主義に於ても誇るものはない、政治に於て誇る所もない、故に彼等は一躍して、行くべく所に行き得るのである。唯だ一つ彼等を邪魔するものがある。それは一種の怨恨である。宗教的大精神の恐るべきはこれである。この力が深く根底に這入つて

しまうと、彼等は自ら転ぶより外はない。⁽⁵⁹⁾

「世界的大精神」の実現、「神の国」の建設は朝鮮人を教化し、日本魂を植え付けることを通じて行なわれるが、上の引用から明らかのように、「神の国」、「世界的大精神」を可能にする日本魂とは決して単なる旧来の日本の延長ではなく、言わば理念型としての理想としての「日本魂」である。それは明治維新以降に確立された天皇制国家において、キリスト教の教化によって可能となった新日本精神に他ならない。従って朝鮮を日本化し、「神の国」の発展を図る場合にも、それは封建制によって養われた狭い意味における忠君愛国の日本魂ではなく、キリスト教によって普遍的なものへ媒介された日本魂、新日本精神によらねばならない。ここに朝鮮伝道においてキリスト教の果すべき役割があるのである。

朝鮮の基督教徒はよしや野心家を失ふことあらんも、慷慨家を失ふことあらんも、意とすべからず。吾人は励んで基督の福音を宣伝すべきなり。吾人は熱禱を捧げて伝道し、敵愾心を靈化して博愛となし、政治的野心を去つて公明正大なる基督魂を受くべきなり。是れ朝鮮をして精神的に偉大ならしむる所依にあらずや。此の精神的偉大を發揮し来るときは、日鮮の基督教徒が大日本帝国に於て優勝旗を得んことは吾人の信じて疑はざる所なり。日鮮の基督教徒は帝国中に帝国を發揮するものなり。朝鮮人にしてもし帝国の内部に胚胎する靈的帝国の臣民たるを得んか。是れ取も直さず、将来の大日本帝国を形成する忠臣義士たる人なり。是れ吾人が朝鮮の基督教徒に望む所にして彼等と偕に終始行動を同うせんと欲する所なり。吾人は基督の靈を有する朝鮮の基督教徒が吾人の真意を諒察し勇奮猛進吾人と協心同力し、以て帝国の同胞をして基督の博愛心に充滿する世界的國民たらしむるの責任を自覚せんこと吾人の祈願して止ざる所なり。是れ独り東洋大帝国の忠良の臣民たるのみならず同時に神の国の忠臣たる所以にあらずや。是れ吾人基督教徒が神より賦与せられたる使命にあらずして何ぞや。⁽⁶⁰⁾

以上のように、海老名の朝鮮伝道論、そして「日韓併合」観は「日本的」キリスト教に基づき、「神の国」論、膨張論をその内容とするものである。それは日本による朝鮮支配をキリスト教思想の側から正当化し、日本魂の植え付けによる日本化を唱える点で、天皇制国家のイデオロギーとして機能していることは明らかである。朝鮮にキリスト教の博愛心を伝え、朝鮮の文化、文明の発展を助けるというキリスト教伝道の本来の有り方が、キリスト魂¹¹日本魂の同一化によって、日本に対する「敵愾心」を融和して、朝鮮民族を精神的宗教的レベルに至るまで日本帝国、天皇の臣民とするという「同化政策」に転倒してゆく所に、

「日本化」、「同化」の問題については、次章でより詳細に分析を進めることにしよう。

五 海老名の「日本化」の思想

これまでの第一における朝鮮伝道の歴史の概観、第二における海老名の日韓併合観の分析によって、海老名の朝鮮伝道と日韓併合に対する見解の中心に、「日本化」の問題が存在し、それらが「日本的」キリスト教に根拠づけられている、という諸点が明らかになった。本節では、これらの考察をうけて、海老名の「日本化」の思想とキリスト教との関係性を論じたい。

本節の論述に入る前に、第一、二節の内容を簡単に整理しておこう。朝鮮伝道、日韓併合に対する日本人キリスト者の態度は様々であったが、その中で組合教会、特に海老名の立場は独特であった。海老名は朝鮮伝道を積極的に支持し、日韓併合を政治的かつ宗教的に肯定した。このことから明らかになったことは、海老名にとって、宗教的事柄（伝道）と政治的事柄（日韓併合）が一つのものと考えられていること、つまりこれら二つの事柄は「日本化」という点では同一視されること、さらに、この同一視の根拠として「日本的」キリスト教が位置づけられる、そして、海老名における伝道と日韓併合の同一視は、朝鮮における反日感情をキリスト教によって懐柔することが目的であり、この点で海老名の「日本的」キリスト教は天皇帝制国家、日本帝国主義のイデオロギーとしての役割を担っていることであった。以下の本節では、これら第一、二節の分析を前提として、海老名の思想的核心が明らかにされねばならない。

まず、海老名において、朝鮮伝道と日韓併合が同レベルで捉えられた根拠と考えられるのは、海老名におけるキリスト魂と日本魂との同一視である。以下、キリスト教魂、日本魂の順で、海老名の主張を検討してみよう。キリスト教魂について。海老名の考えるキリスト教魂というのは、キリスト教神学においてロゴス（キリスト）と言われるものであり、ロゴスは歴史魂あるいは宇宙魂として歴史と宇宙（自然）を支配し、規定している存在である。⁶¹⁾

基督教の精神は基督魂である。この基督魂は人間界の一大顕象として史上に顕れて来たのである。聖書のヨハネの系図はキリストの宇宙的内在の靈性を紹介するものであります。この系図によれば、キリストは人類史又は民族史の裏面に内在する靈能である。⁶²⁾

ヨハネはこの靈能をロゴスといつて居る⁽⁶³⁾。また、ロゴスは宇宙に於ける、又歴史に於ける、又個人に於ける神の内在である。故に歴史的精神の裡面に存在する精神の精神であります⁽⁶⁴⁾。

これに対して、「日本魂」というのは、日露戦争後の時期から海老名の思想に現れたものであるが、彼は一九〇五年一月一日の『新人』の「日本魂の新意義を想ふ」の中で次のように述べている。すなわち、

印度は個人の仏陀を生じたれども、國家の仏陀を生ずること能はざりき。支那は個人の聖人を起したれども、國家の聖人を起すこと能はざりき。猶太は國家の神子を見んと欲して翹望措く能はざりしと雖も、個人の神子を祝したるのみにして其民族年來の宿望は之を体達すること能はざりき。日本に於ては古來聖人なし、仏陀なし、又神子の顯現なし。然りと雖も日本の國家魂は能く聖人を奉迎して君子國を造りたり、(中略)大日本は不可思議なる國家魂なり。日本民族は皆此魂に指導せられ啓発せられつゝあるなり。

つまり「日本魂」は國家あるいは民族としての日本の魂であり、歴史の中で民族を指導してきた日本精神の内実あるいは本質である。これは「大和魂」とも呼ばれ、日本の歴史の中でしだいに發達してきたと考えられる。

即ち此の大和魂の發達であります。元は小さい種であつた。或は神武天皇の、いや神武天皇に附いて居つた所の人々の中にあつた所の種であつた。それが發達をして恰度領地の広がつて行く程に此の大和魂が大きくなつて行く。一時は大和の國の魂其時は小さい魂、純潔ではあつたらうけれども小さい魂、大和の國の魂、五畿内の大和の國の魂、所が今漸々広がつて居る。大きくなつて来て居る。……其の精神が發展して東北の方に広がつて行き、さうして遂に北海道に行き、今や千島に行き樺太に行きさうして南の方は彼の琉球からして台灣の方にずつと広がつて来て居るのだ。さうして西の方は朝鮮から此の滿州の方に広がつて来て居る⁽⁶⁵⁾。

日本魂は海老名に従えば、神武天皇期にまで遡る日本精神であり、仏教傳來以前の古代日本精神、つまり神道精神である。そして日本の歴史は海老名によれば、大和魂の發達、しかも領土拡大としての發達の歴史と解釈され、従つて日本魂は、世界全体へと普遍化する可能性を持ち、その途上にあるものと考えられる。もちろん、これにも領土拡大が伴うことは言うまでもないことであり、ここから日本國家の膨張論が出てくるのも必然的である。また日本魂は、個々の國民においては、國家に対する愛國心となる。

大和魂と云ふものは實に力有るもの、旺なるもの、元氣あるもの、……彼の乃木大将の自殺の如きものが、大和魂の誠の現はれ

であるならば、或は此の満州の原野に於て露兵と戦つて、さうしてその熾んに戦つて命知らずに戦つて、忠君と言ひ、愛国と言ふことを標榜して戦つた其の精神を大和魂と言ふならば、夫れは如何にも盛んなる魂だ。⁽⁸⁶⁾

従つて、海老名が日露戦争を積極的に評価したこと、つまり彼の戦争論も、当然、以上の「日本魂」論と結びついてくる。例えば、海老名は次のように述べている。

私は日露戦争の時に此の大和魂を其の点からして論じて見たことがございます。これは『新人』といふ雑誌の社説に書いたのであります。それがあちこちに響きました。私が聞いた所に因ると、伊藤公がそれを読んで非常に悦ばれたさうであります。⁽⁸⁷⁾

ここで『新人』に載つた諸論文というのはすでに第四章の戦争論で分析されたものを指す。

では、以上見てきた「キリスト魂」と「日本魂」とはどのように関係づけられるのであろうか。結論を先に言えば、海老名において、「キリスト魂」と「日本魂」は、同一の「宇宙魂」の現実として同一視される。

吾人は此日本魂が必然宇宙魂に其本源を深うするを承認せざるを得ず。其本深からずして此の如く末栄ふるものは吾人未だ之を聞かず、故に吾人は断言す。大日本魂の出処は深く又遠く宇宙魂の中に存せざるべからずと。其二千五百年の歴史魂は宇宙魂の権化に外ならずとせんや。然らば則ち宇宙魂とは抑何ぞや。宇宙魂は天地の公道にして、吾人は之をロゴスと言はんと欲す。⁽⁸⁸⁾

このように、キリスト魂と日本魂とは、宇宙魂であるロゴスがそれぞれの歴史的過程の中で現実化し、展開したものであって、本質的に同一のもので考えられる。もちろん、歴史的現実においては、キリスト魂と日本魂とはそれぞれ独立した独自の歴史を持ち、歴史魂としては区別される。よつて、両者の同一性は、潜在的なものと言わなければならぬ。更に引用すれば、

ロゴスはユダヤ史の裏面に存在し、又ギリシヤ史の裏面にも存在したる如く、……日本史の裏面にも存在して、日本民族を指導し、又聖化しつゝあるのを、我々は信ずるのであります。古来日本史に於ける幾多の俊秀なる人物は、同一の霊能に教へ導かれたるを、我々は信じて疑はない。その人物が神道思想の形式を、取りたるも、……そこに相互に共唱して、ハーモニーを作る基調があります。この基調に我々は遍在のロゴスを見出すのであります。この基調そのものであるロゴスが、日本精神の裏面に内在して日本精神を聖化しつゝあるを、我々は認むるのであります。⁽⁸⁹⁾

本章の第一、二章で分析した「日本化」の問題も領土拡大を伴つた日本魂の自己実現、自己発展の一環として考えられる。朝鮮民族

の日本化というのは、日韓併合という領土拡大を基礎としつつ、そこから更に進んで日本魂を朝鮮民族に植えつけることであり、日本魂の発展の重要な一過程と位置づけられる。これをキリスト教神学を用いて理論化し、キリスト教の側から正当化してゆくところに、海老名の神学的思想の特徴があると同時に、これが海老名の「日本的」キリスト教の危険性、問題性に他ならない。こうした海老名の思想は、確かに、朝鮮の正統的キリスト教界の指導者と多数の信者から反発を受けた。例えば、

日本の異端者として教へられ、異端の雄弁家として知ったので、師の大名を以てしても、集り来るものは遙かに内地人に劣つて居つた。⁽⁷⁶⁾

しかし、次の例の示すように、海老名の思想の与えた感化も無視できないものであり、海老名の思想の問題性は単に思想のレベルにおいてだけでなく、現実的で実際的なものであったと言わねばならない。つまり、一九一〇年四月二日に海老名が京城の日本商業会議所、あるいは基督青年会館において行なった「日本魂の発展」という特別演説について、海老名は次のように記している。

余が一老婦に向つて、能く分かりましたかと聞いたたら『はいはい能く分かりました。こんな御話しを度々聞きましたら、私共の魂がドンナに大きくなるも知れません』と挨拶した。⁽⁷⁷⁾

また、「日韓併合」当時の法務大臣、趙重応⁽⁷⁸⁾など感化を受けた有力者も少なくない。

海老名師は当夜救世の靈能を顯し滔々数万言一千の衆何れも靈感に打たれぬはなかつた。子爵趙重応氏は海老名氏の説教一場の謝辞に合せて、所感を述べられ、『自分は海老名牧師が、お前方に天父のむすこむすめとなれと云はれたのを聞いた時には思はず涙が出た』と云つて其の演説を結ばれたのは、真実の告白で聴衆一般の心腸を代表されたものであつた。⁽⁷⁹⁾

さて、キリスト魂と日本魂の潜在的本質的同一性が現実化し、その同一性が歴史的に実現することは、キリスト教と日本とにとって、どのような意義があり、また、それはどのような形態をとるのであるか。これらについて海老名の考えを見てみよう。

まず、日本魂にとってキリスト魂との同一性を現実化することは、日本魂が世界魂として発展し、世界的普遍的な魂となるために不可欠である。明治以前の日本においては自尊他卑の排他主義（尊王攘夷）のため、日本精神は眞の國際精神となつてはいなかつた。偏狭な島國根性、民族主義を克服し、眞の國際精神たるためには、普遍的世界宗教であるキリスト教に媒介されなければならないと、海老名は考へる。

新しき人とは如何なる人をいふものであろうか。新しき日本人とは新しき日本魂を有するものをいふ。新しき日本魂とは境遇に於ける新しき日本を經營する新しき日本人の新しき実験である。……日本人が世界列國の間に發展するに際し必ず起るべき問題である。王政維新の大業は尊王攘夷の精神を振起して、成し遂げられたのである。……こゝに要する新しき日本魂とは、世界的博愛を旨とするものでなければならぬ。言い換ふれば、世界人類を己れの隣人と心得、彼等と共に村を建て、町を設け、又市を起す所の友愛の心情でなければならぬ。この友愛の心情は世界何の所に於ても歓迎せられない所はなからう。⁽⁷⁴⁾

こうしてキリスト教の博愛、友愛の精神、普遍性との同一性を実現した日本魂は、「新日本魂」であり、「新日本精神」と言われる。新日本魂は、日本の歴史魂である日本魂が明治時代になって、天皇制国家という政治的基盤の中で、キリスト教に媒介されることによつて、本来自らの持つていた可能性を実現したものであり、世界的普遍性へ開かれた民族精神、あるいはヘーゲルの言へば民族精神が世界精神へ自らを止揚したものである。

これに対して、キリスト魂にとつても日本魂との同一化はきわめて意義深いものと海老名は考へる。海老名が西洋化されたヨーロッパのキリスト教に対して、キリストとの直接的な交わり、あるいは「キリストの宗教」に帰ることを主張した。ヨーロッパのキリスト教を越えて、日本人としての体験、宗教性に根ざしたキリスト教（つまり、海老名の「日本的」キリスト教）を形成することはキリスト教自体にとつても進歩であり、本来持つていた可能性の実現である。少なくとも日本、あるいはアジアでキリスト教が土着するためには、キリスト教は何らかの仕方で日本的な宗教、思想伝統に媒介されなければならない。もし、それが実現しないならば、キリスト教は日本人にとって抽象的な普遍性を持つにすぎず、日本人の救済を現実に行なう力を持たないと考へられるからである。海老名はこの新しいキリスト教を「新プロテスタント」と呼ぶ。新プロテスタントと言われるのは、近代の啓蒙主義以前の宗教改革者たちの、そしてプロテスタント正統主義のプロテスタントに対して、ヨーロッパ・キリスト教の伝統に対する批判を通じて他律的伝統からキリスト自身との交わりに帰つたキリスト教である。⁽⁷⁵⁾

改革者等が旧式の宇宙觀を有して居つた間は、その真面目は頭はれなかつたのであるが、科学が宇宙の鍵を握つて、宇宙の庫を啓発し来るに當つて、プロテスタント教の眼前に一新天地が開展し来り、プロテスタント教そのものがその面目を一新して、宇宙を享樂する新プロテスタント教とはなつたのである。⁽⁷⁶⁾

この新プロテスタント教への転換を、海老名は、近代ドイツの思想家たち、例えば、カント、ヘーゲル、シェリングの中に見ているが、海老名が新プロテスタントの特色と考えるのは、近代的自律的な批判精神というよりは、むしろドイツ観念論、ロマン主義、特にシュライエルマッハーにおけるような「神人合一」としての宗教理解であった。

人の善良なる意志と神の命令とが一致して違はざる所に、神人合一が認めらるゝのである。之れを要するに近世の基督教徒は太古よりの経験を積み重ね、その内的靈能を發揮し来りたる結果として、その宗教的実質を豊富ならしめ、その権能の偉大を自覚したるを以て、神人合一の真理を体得するやうになつて来た。ここにプロテスタント教はその真面目を發揮し、以て新プロテスタント教の一生面を開き来つたのである。⁽⁷⁷⁾

海老名が日本魂と同一視したのは、このような神人合一を特徴とする新プロテスタントであり、これは海老名における反教条主義、体験主義に他ならない。⁽⁷⁸⁾従つて、明治日本における日本魂とキリスト魂の同一性の現実化の主張、つまり日本精神とキリスト教の新しい統合の主張を可能にしたのは、海老名における体験主義、神人合一としての宗教理解であり、更には彼自身の「神の赤子」の体験であったと言ふことができよう。海老名は日本魂とキリスト魂との潜在的同一性が、明治維新以後の天皇制国家の確立と日本の海外への膨張という時代状況において、新日本精神と新プロテスタントの統一という仕方で現実化したと考へたのであり、このような「潜在的」から「現実的」へのロゴスの現実化として日本史、さらには世界史を解釈したのである。以上が海老名の「日本的」キリスト教の核心であつて、彼の朝鮮伝道論も日韓併合観もそこから理解されねばならない。またこの「日本的」キリスト教こそが、日本におけるキリスト教の土着化問題に対する、海老名の解答と考えられるわけであるが、それによつて、日本精神、神道はキリスト教的に解釈され、同時にキリスト教は、海老名の意味で「日本化」されることになった。

それゆゑ、本節のテーマである「日本化」との関係を明確化するならば、海老名が本来、キリスト教化であるはずの朝鮮伝道を「日本化」と同一視したのも当然の帰結と言わねばならない。そこからまた当然の結果として、日本への同化としての日韓併合も積極的に承認されることとなる。キリスト教と日本との関係、日本におけるキリスト教の土着化に真剣に正面から取り組んだ点において、特にキリスト教精神と民族精神が何らかの仕方に関係づけられねばならないという洞察において、海老名のキリスト教思想は積極的に評価されるべき点も少なくない。また明治時代以降の日本という時代状況の中でキリスト教信仰の伝道と取り組んだ海老名の意図自体も承

認されるべきであらう。しかし、これらの点にもかかわらず、海老名の「日本的」キリスト教において、その意図が転倒してキリスト教の歪曲化が生じていること、彼の思想が天皇制国家とその侵略的膨張政策のイデオロギーとして機能していることは明白であり、日本におけるキリスト教の土着化に対する海老名の解答を我々は受け入れることはできないであらう。実際、キリスト教と民族との関係をいかに考えるか、という問題は、民族国家成立以降の近代の、そして現代のキリスト教にとってきわめて困難な問題である。この問題が緊急の課題となったのは、海老名や内村、植村らの日本キリスト教界の初期指導者たちにおいてばかりでなく、例えばワイマール時代（ドイツのワイマール共和国時代、第一次世界大戦後ナチス政権、一九一九～一九三三）のドイツにおいても同様であった。ワイマール期、そしてナチス期のドイツでもキリスト教会と民族精神（ゲルマン民族）との関係をめぐって、両者の同一性を主張するドイツ的キリスト者と両者の峻別を主張するバルト、ニーメラーらの「告白教会」の激しい論争（ドイツ教会闘争）が行なわれた。この論争は、日本キリスト教における海老名と内村との相違、渡瀬―柏木論争と類似したものと考えられる。なぜなら、神と民族、教会と國家の両者の連続性と断絶性というのが争点だからである。海老名や「ドイツ的キリスト者」のように両者の連続性と同一性の中に断絶性を解消し、キリスト教を國家のイデオロギーとする立場も、また単に両者の断絶のみを主張し、現実の歴史の中における神の働きと國家、民族に対する教会の責任を否定する立場も（バルトや内村をこの立場と考えるのは誤りであるが、特にワイマール期のバルトにおいてこの傾向が見られることは否定できない）、キリスト教信仰、キリスト教思想としては承認できないであらう。ドイツにおけるワイマール時代のキリスト教思想としては、ヒルシュ（Emmanuel Hirsch, プロテスタント神学者、哲学者、一八八八～一九七二）などの「ドイツ的キリスト者」とバルトとの両者とは違った第三の道を取ったP・ティリッヒ（Paul Tillich, プロテスタント神学者、哲学者、一八八六～一九六五）の立場など、参考にすべきであるが、我々がこれまで論じてきた海老名の思想も國家、民族とキリスト教との関係を考察する上で重要な示唆を与えてくれるものと言えるであらう。実際、海老名の「日本的」キリスト教、「新日本精神」は、キリスト教と國家との関係を、その後の日本、あるいは朝鮮のキリスト教会が考える際に大きな影響を与えた。

註

(一) 外国ミッションからの諸教派の自立については、

土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』（新教出版社、一九八〇年）の第四章、「諸教派の成立と展開」（一三七～一六七頁）を参

照。また、日本組合教会の伝道団体である日本基督教伝道会社の米国組合教会のアメリカン・ボードからの経済的独立に対して海老名の果た役割は少なくない(本論文の第二章参照)。

(2) 土肥昭夫『日本プロテスタント教会の成立と展開』(日本基督教団出版局、一九七五年)、九七～一〇一、一四三～一四四頁、などを参照。

(3) 大内三郎、海老沢有道『日本キリスト教史』(日本基督教団出版局、一九七〇年)、四二〇～四三三頁。

(4) 同上書、四二四頁。

(5) 同上書、四三〇頁。また、飯沼二郎、「三一事件と日本組合教会―特に渡瀬・柏木論争について―」(『日本の近代化とキリスト教』同志社大学研究所、キリスト教社会問題研究会編、新教出版社、一九七三年)、五九頁も参照。

(6) 以下の、日本組合教会の朝鮮伝道に関しては次の文献を参照。

松尾尊寬『日本組合基督教の朝鮮伝道―日本プロテスタントと朝鮮(一)―』(『思想』、五二九号、一九六八年七月号)、三・一運動と日本プロ

テスタント―日本プロテスタントと朝鮮(二)―』(『思想』、五三二号、一九六八年九月号)。

大内三郎『日本キリスト教史』(日本基督教団出版局、一九七〇年)、四二五～四三三頁。

飯沼二郎「三一事件と日本組合教会―特に渡瀬・柏木論争について―」(註(5)と同じ)、『日本帝国主義下の朝鮮伝道』(韓哲曦共著、日

本基督教団出版局、一九八五年)

土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』(新教出版社、一九八〇年)、三〇一～三二八頁。

(7) 『護教』、九七八号、(一九二〇年四月二十三日号)一頁。

(8) 木原外七は初代日本メソヂスト教会牧師、日本メソヂスト教会海外伝道局から京城メソヂスト派遣牧師。

(9) 石原保郎は、一八五八年(安政五)備前国(岡山)に生れ、一八八〇年日本基督教牧師となり、一九〇六年より、日本基督教伝道局の求めに応じ旧満州・朝鮮京城などに伝道した。帰国後赤坂教会赴任、一九二九年死去。

(10) 宮川経輝「宮川氏の入韓談」(紀行)、『基督教世界』一〇五九号、一九〇三年二月一〇日。宮川は組合教会会員で当時、日本組合基督教会大阪教会牧師。

(11) 押川方義は(一八四九～一九二八)東北学院院長、横浜ブラウン塾に学び、J・H・バラより受洗、日本基督教会創立にあずかった。また、北越学館を創立、のち仙台に伝道、一八八五年ホーイ宣教師と協力して東北学院を創立、一九一七年晩年には政治を志して憲政会代議士となった。

(12) 本多庸一は、(一八四八～一九二二)日本メソヂスト教会初代監督、弘前に生れ、横浜のブラウン塾に学びS・R・ブラウンより受洗東奥義塾を再興し、弘前公会を創立した。青森県会議長、一八九〇年青山学院長となる。メソヂストの三派合同するや、その初代監督に選ばれた。

(13) 尹健次「日本資本主義の前進基地としての京城学堂」(『海峽』一一号、一九八二年一月)、また飯沼二郎『日本帝国主義下の朝鮮伝道』六

五、七四頁を参照。

- (14) 渡瀬常吉は、一八六七年（慶応三）八代藩士の長男として八代に生れた。渡瀬家は家禄一五〇石であったが、維新のさい零落した。常吉は一八八二年徳富蘇峰の大正義塾に入り二年間学んで小学校教師となり、一八八五年代教会（維新教会）で、O・H・ギューリックによって受洗、一八八七年海老名弾正の紹介で熊本英学校教師として派遣された。一八九四年海老名弾正本郷教会の伝道師となり組合教会の機関誌『基督教世界』編輯人となった。
- (15) 『基督教世界』（二三九〇号、一九一〇年四月二八日）
- (16) 渡部学『朝鮮近代史』（勁草書房、一九六八年）一五七〜一五九頁。
- (17) 柏木義円『渡瀬氏の『朝鮮教化の急務』を読む』（『上毛教界月報』第一八六号、一九一四年四月一五日）
- (18) このように組合教会は、「日韓併合」を積極的に評価して朝鮮伝道を本格化していったが、日本のキリスト者の「日韓併合」についての見解は海老名のように日本の帝国主義的膨張を正当化するもの、（詳細は第二節で論じる）、植村のようにそのひずみの修正を求めるもの、内村のようにこれを正面から批判するもの、というように様々であった。これについては、土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』、三〇三〜三〇八頁を参照。
- (19) 渡瀬常吉『朝鮮伝道開始の記』『基督教世界』（一四五四号、一九一二年七月二七日）
- (20) 同上書
- (21) 『京城教会拡張伝道概況(二)』『基督教世界』（三九一号、一九一〇年五月五日）
- (22) 渡瀬常吉『朝鮮教化成績報告』、一九一七年、六〜七頁。
- (23) 拙論「津田仙と朝鮮（日本文化研究、第四輯、啓明大学校日本文化研究所、一九八五年四月）を参照。
- (24) 朴沆「黎明の章」（『実録韓国基督教』一〇〇年、第一巻、韓国基督教出版局、一九七一年五月）三二〇〜三二一頁。
- (25) 渡瀬常吉『朝鮮伝道開始の記』『基督教世界』（一四五四号、一九一二年七月二七日）
- (26) カンハベ「韓国長老派神学に関する研究」（『神学指南』三三三卷四号、一九六六年）
- (27) 『朝鮮の統治と基督教』（朝鮮総督府刊、一九二二年）六頁。
- (28) 渡瀬常吉『朝鮮伝道現状報告』『基督教世界』（一五二二号、大正元年一月一七日）
- (29) 渡瀬常吉『朝鮮教化の急務』（警醒社一九一三年一〇月）一〇〜一二頁。
- (30) 同上書、一五頁。
- (31) 柏木義円『渡瀬氏の『朝鮮教化の急務』を読む』（『上毛教会月報』第一八六号、一九一四年四月一五日）。なお、渡瀬―柏木の朝鮮伝道をめぐる論争については、註(6)の飯沼二郎氏の研究を参照。

- (32) 海老名弾正『朝鮮教化に就いて天下の有志に訴ふ』、一九一四年、二頁。
- (33) 『基督教世界』、大正三年一月一日。
- (34) 佐藤繁彦『鮮人伝道の危機』、『福音新報』二二五五号、一九一九年七月一七日。
- (35) 渡瀬常吉『朝鮮教化成績報告』、一八一七年二月、二一〜二三頁。
- (36) 『朝鮮民族の運命を觀じて日韓合同説を奨説す』、『新人』、第五卷、第七号、一九〇四年七月一日。
- (37) 『日韓合併を祝す』、『新人』第一卷第九号、一九一〇年九月。
- (38) 海老名弾正『國民道徳と基督教』(一九二二年)、一三五頁。
- (39) 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』(新教出版社、一九八〇年)、三〇三〜三〇八頁などを参照。
- (40) 『植村正久著作集』二卷、二六二頁。
- (41) 内村鑑三『聖書之研究』一一三号、一九一〇年九月一〇日、三三七頁。
- (42) 同上書、一一五号、一九〇九年二月。
- (43) 同上書
- (44) 『内村鑑三全集』一八卷二三〇頁。
- (45) 『基督教世界』一九一〇年五月五日。これは「日韓併合」の四ヶ月前、すなわち一九一〇年四月三日に、組合教会の拡張伝道の一環としてソウルの皇城基督教青年会において、「神の国」という題で行なわれた講演。
- (46) キリスト教神学における終末論については、例えば、熊野義孝『終末論と歴史哲学』、『熊野義孝全集』第五卷、新教出版社)などを参照。
- (47) 海老名弾正『戦後の最善経営(満韓人の日本化)』、『新人』第五卷第八号、一九〇四年八月。
- (48) 海老名弾正『日本教化論』下、『基督教世界』二三九六号、一九一〇年六月九日。
- (49) 『日本教化論』下。
- (50) 海老名弾正『國民道徳と基督教』一九二二年二月、一〇〇〜一〇一頁。
- (51) 同上書
- (52) 同上書
- (53) 岩井文男『海老名弾正』(日本基督教団出版局、一九七三年)一八九頁。
- (54) 奈良大会宣言書

我儕、耶穌基督を教主と尊信し神の召を蒙れる者、大に時勢に慨する処あり、茲に南都に会して天父に祈願し、聖靈の恩化に浴し、終に左の綱領に従ひて、福音を宣伝し、福の國を建設せんことを期す。

- 悔罪惡を改し、基督により天父に帰順すべき事
 —人は皆、神の子なれば互いに愛隣の大義を全うすべき事
 —一夫一婦の倫を保ちて家庭を深め、父子兄弟の道を尽すべき事
 —國家を振興し、人類の幸福を増進すべき事
 —永生の望は信と義によりて完うせらる事
- (55) 海老名弾正『帝國の使命と韓國の復活』(『新人』八卷九号、一九〇七年九月)
- (56) 海老名弾正『國民道德と基督教』一九二二年二月、一〇二頁。
- (57) 海老名弾正『向上清話』(大學館、一九一五年八月)二二〇頁。
- (58) 同上書、二二一～二二三頁。
- (59) 海老名弾正『向上清話』(大學館、一九一五年八月)二三三頁。
- (60) 『朝鮮の基督教徒を歓迎するの辞』(『新人』一九一〇年一月)
- (61) 「ロコス」(Logos)という概念は、ギリシアーキリスト教—ヨーロッパの宗教と哲学において中心的位置を占める。ギリシア哲学においては、万物を支配する「法則」、思惟の「根拠」、数学における「比例」、「尺度」、「思考能力」、「理性」、「人間精神」などの多義的意味を持って使われた。
- キリスト教神学では、ヨハネ福音書の冒頭において、「初めにロコスありき。ロコスは神ともにもあり、ロコスは神なりき」(ヨハネ、一・一)と述べられるように、「ロコス」は父なる神(創造主)に対しては「子なる神」、あるいは、神の内的原理として神の自己啓示と世界創造の役割を果すものと考えられる。この創造に先住するロコス(三位一体の神の第二位格)が歴史的事実として世界に出現したのが、イエス・キリストとされる(受肉—歴史の中心)。「ロコス」とは、自然と歴史を規定する原理、法則であり、それ自体、神格であって、イエス・キリストにおいて歴史的に現実化したものである。
- 海老名がキリスト教魂、歴史魂、宇宙魂としてロコスに言及するのも、以上の意味においてである。なお、「ロコス」については、P・テイリッヒ、『キリスト教思想史I』(テイリッヒ著作集別巻二、白水社、一九八〇年)、六九～七七頁。あるいは、『哲学事典』(平凡社、一九七一年)、一五一～一八頁などを参照。
- (62) 海老名弾正『基督教大観』(先進社、一九三〇年)一七頁。
- (63) 海老名弾正『日本精神の本質とキリスト教』(近江兄弟社、一九三四年)、五四頁。
- (64) 同上書、五六頁。
- (65) 海老名弾正『修養の枝折』(其三)(満州日報社、一九一五年九月)、三七六頁。

(66) 同上書、三六〇頁。

(67) 同上書、三七八頁。

(68) 『日本魂の新意義を想ふ』(『新人』、六卷一号、一九〇五年一月一日)

(69) 海老名弾正『日本精神の本質とキリスト教』(近江兄弟社、一九三四年)五六―五七頁。

(70) 南陽学人『海老名牧師と朝鮮』(『新人』、一六卷七号、一九一五年七月一日)

(71) 『朝鮮伝道開始の記』(『基督教世界』、一四五四号、一九一一年七月二七日)

(72) 趙重心は、日韓併合の時、李完用内閣に入り法務大臣となり日韓併合に最も力があった。また総督府中樞院顧問。一九一九年死亡。

(73) 渡瀬常吉『活気に満ちし朝鮮伝道の概況』『基督教世界』一六一〇号(一九一四年七月三〇日)

(74) 『新しき日本魂』(『新人』、一五卷三号、一九一〇年三月一日)

(75) このような海老名のプロテスタントと新プロテスタントの区別は、トルレルチの行なつた区別に類似している。トルレルチの近代プロテスタントイズム論については、例えば、『近代プロテスタントイズム』(『トルレルチ著作集 九』、ヨルダン社、一九八五年)、『ルネサンスと宗教改革』(岩波文庫)などを参照。

(76) 海老名弾正『基督教十講』(警醒社、一九一五年一月一日)一五五頁。

(77) 同上書、一六六―一六七頁。

(78) 例えば、海老名は、自分の信仰について次のように説明している。

「勿論西洋の本も読んでその感化を受けたことは間違ひない。……けれども我々の中に生え抜いて来る所のものがあった。それはジェーンズ先生(熊本洋学校のアメリカ人教師；注筆者)が教へて呉れたのではない。先生は大いに授けては呉れた、併し種子を播いて呉れたのではない。然らば誰がその種子を播いて呉れたか。私は天の神が播いて下さつたさと申上げたい。アメリカから貰つたものでもなく、ヨーロッパから貰つたものでもない。その種子は神様から直接に頂いた。そして私共の心の畑に生長したのであります。」(『新日本精神』、京城基督教青年会刊、一九三七年)一二頁。

(79) 註(76)を参照。

(80) ティリツヒについては、次の論文を参照。

御父 近、『ヴァイマル社会とキリスト教―前期ティリツヒの政治思想を中心として―』(宮田光雄編、『ドイツ教会闘争の歴史』創文社、一九八六年)

六 結 び

以上の各章において我々は、海老名の思想を「日本的」キリスト教に着目することによって分析した。それによって、「日本的」キリスト教形成の時代的あるいは伝記的背景、形成過程、そして「日本的」キリスト教の内容と具体的展開が明らかになったと思われる。従って、本研究の目的はそれで達せられたわけであるが、最後に結びとして、海老名研究の意義について若干の言及を行ないたい。

現代において海老名の思想を研究する意義は、海老名が直面している問題の持つ普遍性と、彼のその問題への答え方の独自性（≡問題性）の中に求めることができよう。海老名の直面した問題というのは、これまで何度か言及してきたナチス期のドイツのキリスト者をはじめ、キリスト教が繰り返し取り組んできた問題、つまり、キリスト教と民族、教会と国家という様々な仕方で表しうる問題であった。海老名ら明治の日本キリスト教界指導者たちは、明治時代という特殊な歴史的状況の中で、キリスト教と日本の伝統的精神文化、宗教、民族性との関係づけという課題（土着化の問題）を引き受けた。海老名の独自性はこの問題を「日本的」キリスト教という仕方で解決しようとしたこと、そしてこの問題に対する正面からの誠実な取り組みがむしろ転倒した帰結を生んでいったということであろう。従って、海老名研究の意義は海老名をはじめ、明治のキリスト者が直面した問題を明らかにし、キリスト教会が明治の天皇制国家を十分に批判できずにファシズムの戦争体制の中へ取り込まれていくメカニズムを解明すること、そしてこの具体的分析からキリスト教と民族の関係、キリスト教の土着化といった基本的問題へアプローチする手掛りを得ることなどが考えられる。すなわち、明治以降の日本キリスト教史を明治国家、天皇制との関係において批判的に実証的に研究し、その思想的問題性を解明することに、海老名研究の意義があると思う。しかし残念ながら、いくつかの先駆的研究をのぞいて、日本キリスト教史の批判的研究は始まったばかりであり、特に海老名の「日本的」キリスト教については批判的研究は皆無と言わざるを得ない。もちろん、このことの理由として、まず海老名弾正の「日本的」キリスト教がキリスト教思想の根本に関わる問題を含んでおり、それを解決することが困難であったこと、つまり、キリスト教の受容、土着化が何らかの仕方でキリスト教の変化（場合によっては、キリスト教の非キリスト教化）を必然的に伴わざるを得ないことが考えられる。従って、海老名の思想の批判的研究はキリスト教宣教についての神学的掘り下げが必要となり、こ

これは今後の研究課題と言わねばならない。また、戦後の日本キリスト教界が多くの場合無自覚、無反省的な仕方で戦前の伝統との連続性の上にあることも、海老名の思想への批判的研究を困難にしてきたと思われる。たしかに、戦後の日本キリスト教界は一九四五年八月一五日の敗戦より新しく出発したわけであったが、韓国の場合と違って、戦前・戦中の戦争協力、神社参拝は、あたかも、過ぎ去った問題であるかのように宣教を進めてきたように思われる（もちろん、日本基督教団における戦責告白のような例外的事例も少なくないが）。それによって明治から第二次大戦に至る日本キリスト教の有り方が客観的、批判的に反省されることは少なく、明治のキリスト教界が真剣に取り組んだ問題も自覚的に論じられることは長い間なかった。しかし将来の日本キリスト教界にとって過去の問題への自覚的反省は同じ過ちを犯さないためにも不可欠なことであり、そのためには日本キリスト教史の批判的研究が必要となるであろう。そこに「海老名研究」の現代的意義があり、本研究がその点で何らかの貢献を為すことができれば幸いである。